

受験 番号	
----------	--

二〇一三年度
入学試験
国語問題

注意
答えはすべて解答用紙に書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① トウメイだったお湯が、気づけばずいぶん黄色がかったいて、あれ、と思うまに茶褐色のようになる。つきからつきへと一瞬一瞬、微妙に色を変えて行く。目が離せない。

……まるで桜が、いつしうけんめい自分の物語を話そうとしているみたいだ。ようこはいつのまにか真剣に色の変化に向き合っていた。

やがて染液はしだいに赤みを帯びて来る。だがまだまだ濃い、褐色の入った色だ。

「もういいころだね」

おばあちゃんはそう言って、縮緬の白生地を沸騰している鍋に入れた。

雪のように白く輝くばかりだった縮緬が、あつというまに茶褐色の液体に染まった。長い年月の桜の呻吟がそこに凝っているようで、ようこはしんみりとした。

「しばらくそうやって菜箸でかきまわしておいで。私は媒染液をつくって来るから」

そう言っておばあちゃんは後ろのほうでバケツに水を入れたり、なにかを混ぜたりしていた。

この桜はきつとこの濁った色のようにさまざまな苦勞を背負って生きて来たのだろう。

いいかげん、ようこの腕も疲れて来たとき、

「いいよ、その縮緬を上げてこっちのバケツに移して」

と言われたので、ようこは言われたとおりにした。滴がぼたぼた落ちるのはしよがない。

「じゃあ。上下よくひっくり返して」

「おばあちゃん、こうやって植物で染めたのと、普通のTシャツとかの色とは、随分違うよねえ。どうして？」

「それは化学染料と植物染料の違いだ。化学染料の場合は単純にその色素だけを狙って作るんだけど、植物のときは、媒染をかけてようやく色を出すだろ(3)う。頼んで素性を話して貰うように。(4)そうすると、アクが出るんだ。自分を出そうとするとアクが出る、それは仕方がないんだよ。だから植物染料はどんな色でも少し、悲しげだ。少し、灰色が入っているんだ。一つのを他から見極めようとすると、どうしてもそこで差別ということが起きる。この差別にも澄んだものと濁りのあるものがあるって、ようこ」

おばあちゃんは、何だか怖いぐらいにようこをじつと見た。

「おまえは、ようこ、澄んだ差別をして、ものごとに区別をつけて行かなくてはならないよ」

おばあちゃんの様子で、ようこはよく分からない言葉でも心に刻んでおかなければならないものがある、と感じている。

「どうしたらいいの」

「簡単さ。まず、自分の濁りを押しつけない。それからどんな『差』や違いでも、なんて、かわいい、ってまず思うのさ」

ああ、とようこはアビゲイルのことを思い出した。でもあのときのことはあまりにも重く大切で、今はまだ、簡単に言葉にしたくなかった。それで、そのことに焦点を合わせながら、直接それに触れないような言葉を自然に選んだ。ようこの人生で、言葉と感覚の、そのような微妙な操作が行われたのは、このときが初めてのことだった。

「そうしたら、『アク』は悲しくなくなるの」

「ああ」

おばあちゃんは遠い目をした。おばあちゃんは、ようこが自分で知らずに行つた、この「離れ技」に気づいていた。けれど、それでも悲しそうだった。

ひっくり返すために一度菜箸で液から上げたとき、ようこは「あ」と声を上げた。

縮緬がそれこそあつと言うまに、茶褐色から赤褐色、赤紫がかった濃い赤へ、みるみるアザやかに変化して行つたのだ。

「すごい」

ようこは目を輝かせた。

「へえ。以前に時々桜を染めたことはあつたけど、こんなのは初めてだね。染め浸けておいて、休憩しよう」

おばあちゃんは水屋を開けて、お茶の支度を始めた。

「私はいいいよ、こうやって見ている」

「そうかい」

おばあちゃんは軽く言つて、熱心にバケツにかがみ込むようにしているようこの姿をおもしろそうに見ていた。

縮緬はしばらくしてからもう一度染液で煮沸され、水洗いされてノキシタの竿に干された。

三人——りかさんも——は、広縁でぼんやりそれを見つめている。

「色がだいぶ、薄くなったねえ」

「染液の中にあるときは濃く見えるね」

おばあちゃんはどうもなげなげだ。

「きつと、きれいな淡紅梅になるよ。桜なのにね。しかもこの時期に。ちょっと変わつてたね」

「おばあちゃん、どうして染めのこと、こんなによく知っているの」

「教師を辞めたころ、しばらくこういうことに興味を持っていたんだよ」

「そうか……」

と、ようこはうなずいて、それなら、と言わんばかりに、

「それは仕方がないんだよ。アクは悲しいものなんだ。そういうものなんだ」
そう言われると、ようこまで悲しくなる。けれど、それは本当のことだと、ようこの中の何かが納得する。

ようこは黙り込んでしまい、それがおばあちゃんの目にも少し悲しげに見えたのだろう、おばあちゃんは、

「ようこはもうすぐ、理科で『昇華』という言葉習うと思うけど」と、優しくゆつくり話しかけた。

「ようこがそうやって、頭でなく言葉でなく、納得して行く感じは、そういう『悲しいもの』が『昇華に至る道筋』をつけるんだよ。難しいね。でも、本当は簡単なことだ。簡単なことほど、言葉で言おうとすると難しくなる」

ようこは、おばあちゃんの話すことが全部「分かった」わけではなかった。けれど、おばあちゃんの、ようこを気遣う優しさがようこを力づけた。

「私、おばあちゃん、でも、ぜったい化学染料より植物染料の方が好き」

「悲しくて？」

おばあちゃんはほほえんで訊いた。

「悲しくて！」

ようこははつきり答えた。

おばあちゃんは、不意に浮かんだ涙を、ようこに気取られないように庭を見つめた。

「人形にも樹にも人にも、みんなそれぞれの物語があるんだねえ、おばあちゃん」

ようこはしみじみと呟いた。

「そうだね。哀しい話も、楽しい話もあるね」

「媒染を変えたら、出てくる物語も違うんだろうか」

「おまえの心持ちによっても変わるだろうよ」

「え？」

(10) ようこちゃんに媒染剤みたいな人になれるよ。

りかさんは少し低い、けれどどこか嬉しそうな声で言った。

「じゃあ、いい色を出す媒染剤になりたいなあ。私、草木の、いろんな話が聞きたいなあ」

ようこは芽吹いたばかりの庭の柿の木の若葉を見ながら言った。

「そうか」

と、おばあちゃんは目を細めた。

生け垣の向こうからさつと一陣の風が吹き、若葉は白い葉裏をみせ、淡紅梅の縮緬はくるりと翻った。

——いい風。

と、りかさんは呟いた。

(梨木 香歩『りかさん』より)

注 ※1 縮緬……絹織物の一種

※2 呻吟……苦しむうめくこと

※3 媒染液……染料が繊維に染まる働きを助ける液体

※4 素性……物事が経てきた今までの歴史

※5 アビゲイル……親善大使として戦前に米国から贈られた

人形のアビゲイルは、戦争中敵国の象徴として槍で突かれ燃やされて焼けこげにされてしまった。その黒いアビゲイルをようこは古い箱の中から見つけたが、どうしても抱きしめてやる事ができなかった。

問一 〓線①④のかたかなを漢字に直し、漢字はその読みを答えなさい。

問二 〓線(1)「おもしろそうに見ていた」とありますが、本文全体の「おばあちゃん」の表情から読み取れる心の変化として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ほほえましく思う ↓ 真剣 ↓ 思い起こす ↓ 感慨深い
- イ 楽しい ↓ 恐怖 ↓ 心ここにあらず ↓ 悲しみ
- ウ 興味津々 ↓ 疑い ↓ ぼーっとする ↓ 照れ
- エ 共感 ↓ おびえ ↓ 心をそらす ↓ 感激
- オ 喜び ↓ 怒り ↓ 心配 ↓ 達成感

問三 〓線(2)「広縁でぼんやりそれを見つめている」の「それ」は何を指していますか。「……ようす」という形で二十字以内で答えなさい。

問四 〓線(3)「頼んで素性を話して貰うように」とありますが、「素性」とは何をたどえたものですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の目に映る植物の姿
- イ 植物の種類ごとの特徴
- ウ ずっと隠れていた、その植物のこれまでの歩み
- エ 植物と向き合っている自分の生まれ育ち

問五 〓線(4)「アク」とありますが、ここで言う「アク」とはどのようなものですか。本文のこれより前の部分から二字でぬき出しなさい。

問六 〓線(5)「澄んだ差別」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 美しいものを選ぶとして、ものを区別すること
- イ いつも正しくものを判断しようとする事
- ウ ちがいを受け入れて愛おしむこと
- エ 差別することなく、平等にあつかうこと

問七 〓線(6)「離れ技」とありますが、これはどのようなことを指していますか。四十字以内で答えなさい。

問八 〓線(7)「それは本当のことだと、ようこの中の何かを納得する」とありますが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おばあちゃんは長年生きてきたので、言っていることが説得力を持つているから。
- イ おばあちゃんがあまりにも悲しそうだったので、思わず同情してしまっただから。
- ウ おばあちゃんの「仕方がない」ということばを聞いてあきらめの気持ちを持てたから。
- エ おばあちゃんの言う悲しさをようこも自分の中に実感できた感じがしているから。

問九 〓線(8)「簡単なことほど、言葉で言おうとすると難しくなる」とありますが、「簡単なこと」ほどなぜ「難しくなる」のですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉で言おうとすると、どうしてもいい加減な表現になってしまうから。
- イ 言葉は表現方法の中でも特に難しいものだから。
- ウ 「簡単なこと」は言葉よりは心で自然に感じとるものだから。
- エ 言葉で言わなくてもわかると思いきんできると、かえって表現しにくいから。

問十 〓線(9)「『悲しくても！』ようこははつきり答えた」とありますが、この時のようこの気持ちを答えなさい。

問十一 〓線(10)「ようこちゃんは媒染剤みたいな人になれるよ」とありますが、「媒染剤みたいな人」とはどのような人のことですか。次の中から最も

きみたちは名前を聞いたこともない遠い国のことでも、たまたまテレビのニュースやインターネットをとおして見聞きすることがありますね。わたしたちのくらしぶりとはまるでちがう様子がそこに映し出されます。うらやましいと思えるくらしもある一方で、爆撃や銃弾にたおれる人たちの悲惨なすがたも目にします。

そんな遠い国の貧しいくらしや、戦火で家を焼かれた人たちのなみだにくれるすがたを目にしたあとで、わたしたちはたいもう次の瞬間には自分たちの日常に戻っています。

A

まるで、ついさつき見た映像は、テレビやパソコンの画面のなかだけにある世界であるかのように考えてしまっています。そして、それをだれからも責められることもありません。

(1)でも、わたしたちが戦争をいまだにこの世界からなくせない理由のひとつは、ここにあるような気がしてなりません。

(2)ほかの人の痛みや悲しみや、寒さやひもじさを想像して、それを感じとる力がわたしたちにはすつかりとぼしくなってしまうたのではないか、そう思うのです。自分たちとはちがうくらしをしている人たちの存在を知ったその瞬間から、遠い国のその人たちは、もうわたしたちの見知らぬ人ではありません。それ以前にはなにひとつ知らなかった相手であったとしても、その人たちが同じ地球上で同じ時を生きていることを知った瞬間から、自分とつながりのある存在として、その人たちをもう無視して過ごすことはできない。ほんとうはそうであるべきなのだ

だったことがあります。

それは、戦争でうしなうまでは「そこにあることがあたりまえ」だと思っていたものの、家族や、だんらんや、しあわせや、のんびりとした時間や、あたたかい食事や、けんかのできる兄弟姉妹や、人の情けや思いやりや、そのほか数えあげればいくらかもあるごくありふれたものが、じつはどれもかけがえのないものであったことに気づくことができた、ということでした。

戦後の食糧難のときには、家族に食べさせるものをもとめて、わたしも列車に何時間もゆられて買い出しに出ました。

買い出し先の埼玉のある農家の縁側でいただいた、わずかばかりのつけもの、なんとおいしかったことでしょう。住んでいるかんきょうはちがっても、おたがい苦しい生活を送る者同士であっただけに、その心づかいがわたしには身にしみてありがたく感じられました。

(4)いのちにしがみつこうように生きていく日々のなかで、人からなにかをいただくたびに、人の厚意にふれるたびに、わたしたちはそのありがたさを実感しました。思いやりを示してくれる相手の気持ちの深さを思い、その人の置かれている状況を**おしはか**つて、感謝の思いをいっそう深くしていたのです。

人々のうえにお日さまが照ることも、雨が大地をうるおすことも、夜が来てまた朝がめぐってくることも、みなありがたく感じていました。

そうして日ごとに、うしなうものよりも新しく得るもののほうがふえていき、だんだんくらし向きがよくなって、わたしたちのくらしにはすこしずつゆとりが生まれてきました。

それは、わたしたちが自分の子や孫たちのために望んだ生活でもありません。食べものや着るものに不自由しないゆたかさを手に入れさえすれば、戦争以前のおだやかな生活にもどれると、わたしたちは思っていたのです。

(2) 、どうやらそこに思いちがいがあつたようです。わたしたちは、つましい生活のなかにある小さなしあわせをも実感できてい

です。

「知る」ということは、じつはこんなに重い意味をもっているのです。知ったからには、知ったことに対して責任が生まれます。なんらかの働きかけも求められるのです。

「そんなめんどうなことになるのなら、知らなきゃよかった」なんていわないでください。新しいなにかを知ることが喜びでもあるでしょう？ でも、きみのいうように、知ってうれしくないこともたくさんあります。それでも、うれしくないことやめんどうなことであっても、一度知ってしまったら、もう知らなかったことになってしまうわけにはいきません。

ことばや、肌の色や、住んでいるかんきょうはちがっても、傷つけられれば痛いし、家族をうしなえば悲しいという、わたしたちと同じ人間の存在をきみは知ったのです。

(1) 、たとえ遠い国の人たちがわたしたちのことをまるで知らなくとも、わたしたちのほうはもうその人たちを知ったのですから、知ったことによつて生まれる責任を負わなければならないのです。

終戦をむかえた六十年前、いまでは老人となった若いころのわたしたちはその多くが、家も家財のいっさいも、そして家族のだれかれをもうしなっていました。戦争が終わって、もう空襲におびえて過ごす日はなくなつたけれども、その日からすぐに戦争以前のおだやかな生活が返ってくるわけではありませんでした。わたしたちの手には、もうなにも残っていないのでした。

だれかが、たとえば国が、みんなに手をさしのべてくれるわけでもありませんでした。そんなよゆうは、だれにもなかったのです。

家も、食べものも、着るものも、なにもかもをうしなつた状態で、とにかくわたしたちは生きていかなければなりません。それは、すさまじいことでした。

ただ、そのすさまじく苦しかった日々のなかにも、わたしたちにとってさいわいなのに、ゆたかさを追い求めるようになってから、そのセンサーをにぶらせてしまいました。あれほどありがたいと感じていたものたちからありがたみが消えて、どれもみなそこにあることが当然だと思ふようになってしまったのです。それとともに、ほかの人のことをおもんばかる想像力もおとろえてしまいました。

おもんばかつて感じとる力がおとろえて、その代わりに、まるでコンピュータが情報を処理するようになるの感情も入れずにもものを見るようになったみたいだと、わたしは感じています。

さつきもお話したように「知る」という行為は想像力や思いやる力を同時にはたらかせながら行うものです。けれど、いまわたしたちがしている「知る」のなかにはぬくもりがありません。ただ情報として処理しているだけです。

そうなる、どんなにたくさんのニュースをテレビや新聞で見聞きしても、見知らぬ人の話ほどこまでも他人事ひとことでしかありません。

「ほかの人の痛みは、その人の痛みであつて、わたしにはまるで関係がない」と思うことになれてしまえば、たとえば戦争も「ここ」にないかぎり、 が解決に乗り出すべき問題として自覚されることさえなくなつてしまいます。

知る力がおそまつになつたとき、他人はどこまでも自分とは関係のない存在にしか見えなくなつてしまいます。戦争を遠く離れたところから見ているときも、戦争の当事者になつてしまったときも、自分のこと以外は理解しようとも知りた

いとも思えなくなつてしまいます。想像力やおもんばかる力のおとろえは、これからの世界にとって最大のキキ①かもしれないとわたしは案じています。そのことを、もつときみの日常に關係するような例をあげてお話ししてみよう。

きみにも経験があるでしょうか。けんかというのは意外にさいいなことをきつかけにして始まるものですが、いったんエスカレートしてしまうと、かんたんにはおさまらなくなつてしまいます。だれかがあいだに入って、その場はけんかをやめさせることができたとしても、二人の心にわだかまりが残っていれば、いつ

また衝突がサイカイされるかもしれませぬ。戦争というのも、まったくこれと似ています。

暴力をふるわれれば痛い思いを味わいますが、痛いのは傷を受けたそのからだだけではありません。心もいっしょに深く傷ついてしまいます。すると、怒りがわつとあふれてきて、この痛みを相手にも同じだけ思い知らせてやらなければ気がおさまらないという衝動にかられるのです。

暴力をふるわれたり、大切なものをうばわれたり、ひどいことをアビせられたりしたときに、その相手に思わず仕返しをしたくなることはきみにも経験があるでしょう。もちろん、わたしにもありました。自分だけが痛い目に合うなんて理に合わないと思うからですね。受けた傷が深ければ、相手への敵意はいつそうかきたてられもするでしょう。

でも、こうしてやられたらやり返すということをつたがいにくり返せば、争いはますますはげしくなり、二人そろって身も心もさらに深く傷つけ合ってしまうこととなります。

そうやってしまっても、まだ争いをやめることができない。うらみがうらみを呼び、ホウフクがいつまでも続く。おとなになっても人間はいつまでもおろかしいものですが、そんな戦争がこれまでも、そしていまも世界のあちらこちらで起こっています。

たしかに、なぐられれば痛い。くやしいし、腹も立ちます。でも、相手に向かつてこぶしをふりあげる前にすこしだけ思いめぐらしてみたいのです。どうか自分が受けた痛みのことだけで、きみの頭と心をつたわらせないでほしいのです。

「なぐられたときに、そんなふうに相手のことを思ってみるよゆうなんてない」

B

問五

線(2)「ほかの人の痛みや悲しみや、寒さやひもじさを想像して、それを感じとる力がわたしたちにはすっかりとほしくなってしまうたのではないか」とありますが、その原因はどういうことだと筆者は考えていますか。答えなさい。

問六

線(3)「知ったことによって生まれる責任を負わなければならない」とありますが、責任を負う態度として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分とつながりのある存在として、無視することができなくなる。
イ 知ってうれしくないことも、無理にでも楽しい思い出にする。
ウ なるべく感情に流されないように、冷静に情報として処理する。

問七

線 a 「だんらん」、b 「おしはかる」の意味として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- a だんらん
- ア はげまし合って協力すること
 - イ 集まってなごやかに楽しむこと
 - ウ 体を寄せ合って暖まること
 - エ 雑談をしてさわぐこと
- b おしはかる
- ア 解釈する
 - イ 確認する
 - ウ 強調する
 - エ 推測する

問八

線(4)「いのちにしがみつこうようにして生きていく日々」とありますが、そのことを具体的に説明している一文を文中からぬき出し、初めの五文字を答えなさい。(句読点も数えます)

問九

線(5)「厚意にふれる」とは何を感じとることですか。文中のことば六字で答えなさい。

よ」と、いまきみが思ったとしてもむりはありません。よりによって怒りが頂点に達しようとしているときに相手のことを思いやるというのは、ほんとうにできそうもないと思えるくらいむずかしいことです。

でも、わたしをふくめておとなたちは、やられたらそれを倍にしてやり返すというくり返しを断ち切れなかったがために、この世界から戦争をなくせないでいるのです。きみたちには、わたしたちとはちがう、もつと強い人間になってほしいのです。

(日野原 重明『十歳のきみへ——九十五歳のわたしから』にもとづく)

問一 線①④のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 (1) (2) に入ることはとして最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア なぜなら イ けれど ウ だから エ たとえば

問三

A に入る具体例として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目の前にならべられたジュースやおかしに手をのぼしたりします。

イ インターネットでゲームの続きを楽しんだりします。

ウ 友達に今ニュースで知ったことをメールで伝えたりします。

エ おこづかいを手にはしかつた本を買いに家を飛び出したりします。

オ ゆつたりと手足をのぼしておふるにつかつたりします。

カ あたたかいふとんのなかにもぐりこもうとしたりします。

問四

線(1)「わたしたちが戦争をいまだにこの世界からなくせない理由」について筆者の考えがまとめて書かれている段落を6ページの本文中からさがし、初めの五文字を答えなさい。

問十

にあてはまることは直後の段落からぬき出しなさい。

問十一

次のア、オについて、B に入る具体例として適切なものは○を、そうでないものには×をそれぞれ答えなさい。

ア たしかに自分は相手に傷つけられたけれど、その苦しみそのまま相手にぶつけてみたところで、何の意味があるだろうか。

イ 相手にも友人がいて家族がいて、笑ったり、かけ回って遊んだりするような日常があるに違いない。

ウ 相手もどこかに傷をかかえていて、わたしの言ったことやしたこと引き金となって、傷がまた痛み出したのかもしれない。

エ 相手がまず心の底からわびて、わたしの受けた傷を全部元通りにしてくれるのなら、ゆるしてやらないでもない。

オ 自分がどれほど傷ついたか、相手にも分かってもらわないと自分の気が済まない。

問十二

次のア、エについて、本文の内容にあてはまるものには○を、そうでないものには×をそれぞれ答えなさい。

ア テレビやインターネットの発達により人と人とのつながりは広がっていくはずだが、現実はそのようになってはいない。

イ 戦争を経験した世代の人間は、戦後の貧しさや苦しさを知っているので二度と戦争を繰り返すことはない。

ウ 空襲で何もかも失った東京にくらべ、地方は十分すぎるほど豊かで食べ物もありあまっていた。

エ やられたらやり返すをくり返すとき、人は相手を責め自分を正当化することばかり考えてしまう。

